

第28回 考古資料展

伊勢原の遺跡



主催

伊勢原市教育委員会

共催

神奈川県教育委員会

公益財団法人 かながわ考古学財団

展示遺跡

- | | | |
|---|-------------------------|---------|
| 1 | 神成松遺跡第4・7地点 | 1 ~ 2 |
| | 株式会社玉川文化財研究所 | |
| 2 | 上粕屋・一ノ郷上遺跡第2次調査 | |
| | 上粕屋・雷遺跡 | 3 |
| | (公財) かながわ考古学財団 | |
| 3 | 伊勢原市 71 遺跡 (粟窪地区) | 4 |
| | (公財) かながわ考古学財団 | |
| 4 | 東富岡・南三間遺跡 (伊勢原市 160 遺跡) | 5 ~ 6 |
| | (公財) かながわ考古学財団 | |
| 5 | 西富岡・向畑遺跡 (伊勢原市 160 遺跡) | 7 ~ 8 |
| | (公財) かながわ考古学財団 | |
| 6 | 子易・大坪遺跡、子易・中川原遺跡 | |
| | 伊勢原市 163 遺跡 | 9 ~ 10 |
| | (公財) かながわ考古学財団 | |
| 7 | 上粕屋・石倉中遺跡第2地点 | 11 ~ 12 |
| | (公財) かながわ考古学財団 | |

伊勢原市内では、新東名高速道路建設事業や厚木秦野道路建設事業、県道 603 号線道路改良事業に先立ち全国でもまれな規模の発掘調査が行われています。今回は、その調査成果を展示しました。

展示に際しては、神奈川県教育委員会、公益財団法人かながわ考古学財団と共催し、神奈川県広域幹線道路事務所、中日本高速道路株式会社、株式会社玉川文化財研究所の御協力をいただきました。

今回は考古資料以外に御寄贈いただいた資料を展示しました。文化財というと古いものや珍しいものというイメージがありますが、私たちの身近にあるものも文化財になるということを感じていただきたいと思います。

かみなりまついせき 神成松遺跡第4・7地点

所在地 伊勢原市上粕屋 1402-2 他

調査期間 平成 25 年 4 月 1 日～11 月 1 日
(第 4 地点)

平成 26 年 5 月 7 日～8 月 14 日
(第 7 地点)

調査面積 1,459 m² (第 4 地点)

271 m² (第 7 地点)

遺跡の立地 神成松遺跡第 4・7 地点は、伊勢原市上粕屋地内に所在し、小田急伊勢原駅の北西約 3 km、標高約 74～76 m 前後の上粕屋扇状地に位置しています。

周辺では、県道 603 号(上粕屋・厚木)道路工事に伴い今回を含めて 7 地点、産業能率大学の建設に伴い 2 地点の調査が行なわれ、縄文時代から近世の遺構・遺物が確認されています。

調査の成果 今回の調査では、主に縄文時代、古墳時代前期、中世、近世の遺構と遺物が発見されました。また、旧石器時代の石器と奈良～平安時代の遺物(土師器・須恵器・灰釉陶器など)がごく少量出土しています。

旧石器時代では、チャート製の尖頭器が 1 点出土しました。中世の遺構から出土したのですが、神成松遺跡で初めての発見となります。

縄文時代では、陥し穴が 12 基、集石土坑が 1 基、土坑 2 基などが発見されました。陥し穴は規模や形状が様々であることから複数時期に渡って造られたものと考えられ、調査地周辺が当時狩猟・採集の場であったことが窺えます。

発見遺構から遺物は出土しませんでした。縄文時代の堆積層からは、中期初頭の五領ヶ台式から後期中葉の加曾利 B 式に至る土器ととも

に石斧・石皿・石錘などが出土しました。

古墳時代前期では、竪穴住居跡が 8 軒発見され、土師器の壺・台付甕・高坏などが出土しました。隣接調査(第 3 地点)では弥生時代後期中葉の住居跡が発見されており、その頃から営まれていたムラであることが考えられます。

中世では、竪穴状遺構 5 基、溝状遺構 20 条、土坑 23 基、ピット 662 基が検出されました。

溝状遺構のうち 12 条は、扇状地の中央部を東西に貫く現行道路(市道 88 号線)と同一方向に延び、幅 1.5 m を有する溝からはバラバラになったウマの骨が出土しました。骨には同一部位が重複することや、歯の摩耗度で推定される年齢差から少なくとも 8 体分が混在することが分かりました。これらは恐らくウマを解体して肉食した残りを捨てたものと考えられます。また、骨に伴い愛知県渥美半島の窯で焼かれた大甕の破片が出土しました。その他には、青白磁の梅瓶など小破片ながら鎌倉の武家屋敷跡で出土するような高級品も出土しています。

近世では、現行道路直下から最大幅 1.2 m の道状遺構を検出し、現在と全く同じ経路と交差点を持つ路面が約 40 cm の厚さで幾重にも堆積する状況が把握できました。路面には 1707 年に噴火・降灰した富士宝永火山灰に覆われているものがあったことから、噴火以前から道が縦横に通じていたことが分かりました。また、畑の畝跡と見られる小溝群や、「イモ穴」と呼ばれる根菜類の貯蔵穴(土坑)が認められたことから、江戸時代には畑が営まれて現在と変わらない景観が広がっていたと考えられます。



神成松遺跡第4地点 古墳前期の竪穴住居跡検出状況



神成松遺跡第4地点 縄文土器出土状況

上粕屋・一ノ郷上遺跡第2次調査、上粕屋・雷遺跡

所在地 伊勢原市上粕屋 地先

調査期間 平成26(2014)年9月1日～

平成26年12月31日

調査面積 1,863 m²

遺跡の立地 両遺跡は、伊勢原市北部、上粕屋扇状地内にある台地と大山山麓南東縁の丘陵に所在しています。

調査の成果 上粕屋・一ノ郷上遺跡第2次調査では、道状遺構、段切り、溝状遺構、土坑、ピット(近世)、竪穴住居址、土坑、ピット(奈良・平安)、土坑(縄文)が見つかりました。

遺物では、陶器・磁器・石製品・金属製品(近世)、土師器・須恵器・灰釉陶器・金属製品(奈良・平安時代)、土器・石器(縄文時代)が見つかりました。上粕屋・雷遺跡では、溝状遺構(奈良・平安時代)と埋没谷まいぼつたにが見つかりました。遺物では、主に埋没谷から陶器・磁器・石製品・金属製品、土師器・須恵器・灰釉陶器・金属製品、縄文土器・石器が出土しています。

上粕屋・一ノ郷上遺跡第2次調査の奈良・平安時代からは竪穴住居址、土坑などが見つかりました。竪穴住居址は、後世の削平により約2分の1程度、またはそれ以下のものがみられました。住居址はカマドを有し、カマド周辺からは遺物が多く出土しています。

出土遺物の中で注目されるのが、H5号住居址から出土した鉄製品です。遺物はほぼ床面から出土しています。遺物の長さは約16cm、幅は約1～2cm、厚みは約0.1～0.7cmを測ります。上端部は何らかのモノで叩かれ、潰れた形状を呈します。上端部付近で本体左右両側に耳状の

突起を有しています。本体中央部には、別個体と思われる先端の尖った鉄製品が付着していません。本体の厚さは上端部から下端部にかけて徐々に薄くなり、下端部はまるでマイナスドライバーの様に扁平を呈します。形状から下端部が刃部で、何らかの道具であったと思われますが、詳細は不明です。

上粕屋・雷遺跡では、遺物は埋没谷からの出土がほとんどでした。埋没谷からは、土師器・須恵器、縄文土器などが出土しました。縄文土器は、中期初頭の五領ヶ台式の口縁部～胴部付近が出土しています。



写真1 H5号住居址



写真2 H5号住居址 鉄製品出土状況

伊勢原市 71 遺跡 (栗窪地区)

所在地 伊勢原市東富岡地先、栗窪地先

調査期間 平成 22 年 10 月 1 日 ~
平成 26 年 9 月 15 日

調査面積 15,745 m²

遺跡の立地 本遺跡は、小田急小田原線伊勢原駅の北方約 2 km の標高 35 ~ 37 m ほどの台地上及びその周辺に位置しています。台地の 0.5 km ほど東側に歌川、0.6 km ほど西側に渋田川があり、北西から南東へ流れています。

調査の成果 栗窪地区の調査箇所は 16 箇所あり、平成 26 年度は、6 区南東、12 区 (・)、13 区の調査を行いました。

6 区南東は、台地の南東の斜面地に位置しています。調査は平成 25 年度にも実施しており、近世の段切り・道状遺構・溝状遺構・畝状遺構・土坑、中世の段切り・道状遺構・溝状遺構・掘立柱建物跡・地下式坑・井戸跡・土坑、奈良・平安時代の竪穴住居跡、旧石器時代の遺物集中箇所が発見されています。平成 26 年度の調査では、中世から近世にかけて利用されていたと思われる道状遺構の続き・近世の溝状遺構・土坑、中世の溝状遺構・竪穴状遺構・井戸跡・土坑などの遺構と陶磁器・金属製品・木製品・銭貨などの遺物が発見されました。中世の遺構の多くは斜面下部の低地際で見つかっています。中世の遺構は、台地の南側の低地際に位置する 10 区・11 区、さらにその西側に位置する調整池でも多数発見されています。今回の調査によって、中世の遺構がさらに東側まで分布していることが明らかになりました。12 区 (・) は台地北東の低地際に位置しています。これまで

の調査で、古墳時代の竪穴住居跡、奈良・平安時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑などが発見されており、今回の調査でも古墳時代後期の竪穴住居跡が 1 軒見つかりました。13 区は、台地西側の裾部に位置しています。調査区の中央部分が削平及び攪乱されていましたが、西側を中心に近世の溝状遺構・竪穴状遺構・井戸跡・土坑、中世の溝状遺構・竪穴状遺構・井戸跡・土坑などの遺構と土器・陶磁器・石製品・金属製品・木製品・銭貨などの遺物が発見されました。近世の遺構は、調査区の南西で 1707 年に富士山が噴火した際に降り積もった火山灰を処分した大型の土坑が 4 基見つかりました。中世の遺構は、東側で区画溝の可能性が考えられる溝状遺構が発見されました。溝の半分は調査区外に延びているため、全体を確認できたわけではありませんが、東西約 18m・南北約 21m の範囲を囲っていたと思われます。溝の規模は、広い所で上部幅 1.7m、深さ 1.2m を測り、断面形態は V 字状を呈しています。溝で囲まれた部分は、大部分が削平や攪乱を受けていて、掘立柱建物跡は発見されませんでした。北側では井戸跡や土坑が見つかっています。



写真 1 13 区中世区画溝と井戸跡 (西から)

ひがしとみおか みなみ み まいせき
東富岡・南三間遺跡(伊勢原市 160 遺跡)

中世と縄文時代の発掘調査

所在地 伊勢原市東富岡 240 他
調査期間 平成 26 年 7 月 16 日～調査中
調査面積 4,726 m²
発見遺構 畝・溝・ピット(近世以降)、^{たてあな}竪穴遺構・^{ちかしきこう}地下式坑・井戸・土坑・溝・炉址・集石遺構・^{ほったてばしらたてもの}掘立柱建物・ピット(中世)、^{しきいしじゅうきょ}敷石住居(縄文時代)
出土遺物 ^{とうき}陶器・^{じき}磁器・かわらけ・^{がしつ}瓦質陶器・土製品・^{せきせいひん}石製品・^{てつさい}鉄滓・銅製品、木製品・人骨・^{かいゆう}獣骨(中世)、^{かいゆう}灰釉陶器・^{はじき}土師器・^{すえき}須恵器(奈良～平安時代)、土器・石器(縄文時代)

1 遺跡の立地

^{ひがしとみおか}東富岡・^{みなみ み ま}南三間(伊勢原市 160)遺跡は、中日本高速道路株式会社による新東名高速道路建設に伴う事前の発掘調査として、平成 26 年度に実施しました。遺跡は伊勢原市北部、東富岡地区に所在し、南北に連なる富岡丘陵から東に派生する東西方向の谷に立地しています。これまでは、平成 22・25 年度に北側隣接地の発掘調査が行われ、古代と縄文時代の集落と、中世から近世の遺構の調査をしました。また、東名拡幅に先立つ平成 2～3 年の調査では、斜面上半部から 5 基の^{おうけつぼ}横穴墓が発見されています。今回の調査区は谷頭部付近の標高 33m 前後の南東向き^{かんしゃめん}の緩斜面の下部に位置しています。

2 調査の成果

今回の調査で検出された主な遺構は、中世の遺構群と縄文時代の敷石住居です。

【中世】

竪穴遺構は、傾斜が緩くなった谷の緩斜面か

ら 17 基が発見されています。竪穴遺構は一辺 2～3m の正方形のものと長方形のものがあり、柱穴があるものがあります。作業場(工房)などと考えられる遺構です。

^{ちかしきこう}地下式坑はローム台地の中近世の遺跡で多く発見される遺構で、今回は 8 基が谷を囲む崖線を利用して作られています。全体は羽子板型で、円形や方形の^{たてこう}竪坑を入口とし、一辺 2～3m の方形の地下室が斜面に掘られています。

井戸は平面が円形を呈し、斜面下位の低地際で 13 基検出されています。すべて素掘りですが、径 2m ほどの小型のものと、径 4m ほどの大型のものがあり、用途に違いがあるものと推定されます。

土坑は、今回の調査で 100 基以上が斜面の中位で見ついています。平面形が円形と長方形を呈するものがあり、中に古銭や^{といし}砥石が出土するものがあります。また、ローム層の斜面地に径 2～3m の円形や方形の深さ 1m 前後の大型土坑が 10 基あります。斜面の黒色土直上まで穴を掘っていることから、ローム土の土取り穴と考えられます。

方形に区画している溝が少なくとも 2 個所で見ついています。区画内は平坦となっているようですが、他の遺構との関係は今のところ不明です。溝の覆土からは鉄滓が出土しています。

真っ赤に焼けた炉址が見ついています。周辺からは大型の鉄滓などが検出され、近くからは粘土を敷き詰めた遺構も見ついています。

^{かじ}鍛冶に関係する遺構と考えられます。

自然礫が密集する集石遺構が見つかってい
ます。土坑の中に構築された集石土坑と包含層中
に礫の広がりが見られるものがあります。集石
土坑からは、礫に混在して土器片や鉄滓、馬の
歯などが出土しています。

径50cm前後のピットが800基以上検出されて
います。柱穴^{ちゅうけつ}と考えられるピットの中で掘立柱
建物の柱穴として復元できるものは、根石の入
った柱穴4本から構成される1棟だけです。

【縄文時代】

縄文時代後期の敷石住居が南斜面で1軒見つ
かりました。一辺5mの隅丸方形の主体部に張り
出し部が付く柄鏡形^{えかがみがた}を呈します。石囲炉^{いしかいろ}の周
りから入り口にかけて、平らな石が帯状に敷き
詰められています。

他に地震を原因とする、地割れや地滑りの痕
跡が、調査区内の各所に見られます。そのため
敷石住居は傾斜してしまい、また地滑りによっ
て歪んでトンネル状になった土坑もあります。
地震が起きた時代は特定できません。

今回の調査で見つかった遺構は、出土遺物か
ら見ると13世紀後半～14世紀前半と15世紀後
半～16世紀前半の前後二時期に分けられるよう
です。主な遺物は、青磁、中国製白磁、常滑甕
・鉢、瀬戸系瓶・碗・播鉢、天目碗、かわらけ、
瓦質花瓶^{けびょう}・火鉢、土製品（羽口・猿）、鉄製品
（釘）、銅製品（小柄^{こづか}、古銭）、石製品（硯^{すずり}、
砥石）、鉄滓等があります。

3 まとめ

東富岡・南三間遺跡は、鉄滓が多量に出土す
ることから鍛冶関連遺跡と考えられます。各遺
構は、谷奥の崖線に地下式坑、ローム台地に土
取り穴と考えられる大型土坑、低地際に点在す
る井戸や区画溝・竪穴遺構など種類別に分布し
ています。これらの遺構が構成する谷間の空間^{たにあい}
が鍛冶に携わる人たちの残した痕跡と推定され
ます。また出土した硯が、この地を管理してい
た有力者を推測する鍵となるものと期待されま
す。



にしとみおか むこうぼた
西富岡・向畑（伊勢原市 160）遺跡

所在地 伊勢原市西富岡 120 他

調査期間 平成 19 年 4 月 1 日～調査中

調査面積 25,390 m²（終了地区含む）

遺跡の立地 本遺跡は伊勢原市の北部西富岡地区の丘陵地帯に所在しています。地形上は西側を南流する渋田川に、東を南北に連なる富岡丘陵に挟まれた台地上に立地しており、標高 50 m 前後の西向きの緩やかな斜面と平坦地になります。

調査の成果 平成 26(2014)年度の調査では、11 区北の近世～旧石器時代の調査と、15 区の近世～旧石器時代の調査を実施しました。

近世から中世の調査では、15 区で畝状遺構のほか、路 1 条、地下式坑 1 基が見つかりました。路（C 1 号路）は、調査区内を東西に約 56m に渡ってほぼ一直線に横切り、富岡丘陵に向かって登り勾配を作っています。路面には大量の河原石が幅約 1 m の範囲で敷き詰められ、石の下から路に併行する溝のほか、波板状凹凸面と呼ばれるピットや楕円形の窪みが等間隔に並ぶ遺構が確認されました。また東端では丘陵に沿って南に向きを変えることが確認されました。

この路は、入念な地業を施して作られただけでなく横断面の観察から、少なくとも宝永 4 (1707) 年の宝永火山灰が降下する以前には作られており、それ以降にも盛土をして路面を作った痕跡がありました。また明治 20(1887) 年の「フランス式彩色地図」にもほぼ同じ場所に路が描かれていることから、近代に至るまで補修を繰り返しながら使用され続けていたことが考えられます。

古代の調査では、11 区北の丘陵斜面で竪穴住居跡 9 軒、掘立柱建物跡 4 棟、竪穴状遺構 2 基のほか、土坑などが見つかりました。この内、H19 号掘立柱建物跡は、柱を建てる位置を溝状に掘る「布掘り」の工法を用いており、溝が一周していました。溝が一周する掘立柱建物跡は本遺跡では初めて検出されました。溝の中からは柱穴が見つかり、南北 3 間×東西 3 間の規模で、南北がやや長い形状を呈しています。また H19・H20 号掘立柱建物跡は、同じ丘陵斜面に作られた他の竪穴住居跡や古代の遺構よりも、高くて見晴らしの良い位置に建てられていることも注目されます。

15 区では、竪穴住居跡 19 軒、掘立柱建物跡 4 棟が見つかりました。H13 号竪穴住居跡では、カマドから煙を出す煙道部分に、底を抜いた土師器の甕を 7 個以上連結して用いたものが良好な状態で見つかりました。

縄文時代の調査では、11 区北で中期の竪穴住居跡 1 軒のほか、集石が 5 基見つかり、15 区では中期（曾利式期）の竪穴住居跡 2 基のほか、後期（堀之内 2 式期）の敷石住居 1 基、土坑 21 基、集石 13 基、陥し穴 6 基が見つかりました。15 区の J 1・J 5 号集石では石を取り除くと、炭化した木材が土坑の底一面に貼り付くように検出されました。集石の底にここまで良好な状態で炭化木材が残っている例は珍しいです。

旧石器時代の調査では、15 区のローム層中（B 1 層）から、剥片（石器を製作する際に出た石の破片）が出土しています。



写真1 15区 C1号路



写真4 15区H13号竖穴住居跡カマド煙道



写真2 C1号路東端



写真5 15区 J4号竖穴住居跡



写真3 11区北 H19号掘立柱建物跡



写真6 15区 J1号集石

こ や す おおつば
子易・大坪遺跡(伊勢原市 No.123)

こ や す なかがわら
子易・中川原遺跡(伊勢原市 No.123)

伊勢原市 No.163 遺跡

所在地 伊勢原市子易地内(子易・大坪遺跡
子易・中川原遺跡)、上粕屋地内(伊
勢原市 No.163 遺跡)

調査期間 平成 26 年 4 月 1 日～調査中
(子易・大坪遺跡)

平成 26 年 4 月 1 日～調査中
(子易・中川原遺跡)

平成 26 年 4 月 1 日～5 月 15 日
(伊勢原市 No.163 遺跡)

調査面積 2,491 m²(子易・大坪遺跡)

4,873 m²(子易・中川原遺跡)

798 m²(伊勢原市 No.163 遺跡)

遺跡の立地 子易・大坪遺跡、子易・中川原遺
跡、伊勢原市 No.163 遺跡は、丹沢山地南東麓に
展開する丘陵の南東側末端縁に位置する遺跡
で、市域を南東流する鈴川の左右岸段丘上に立
地しています。

平成 26 年度は、子易・大坪遺跡 3 地点(2,491
m²)、子易・中川原遺跡 1 地点(4,873 m²)、伊勢
原市 No. 163 遺跡 3 地点(798 m²)の調査を行
いました。

調査の成果

子易・大坪遺跡 平成 26 年度は、中世の屋
敷跡が発見された 4 区北の隣接地 3 地点(8・9・10
区)で調査を実施しました。8 区と呼称する調査
区で発見された縄文時代後期の集落跡をはじめ
め、縄文時代中期の屋外埋設土器や集石(8
区)、中・近世の流路(9 区)や、厚く堆積する宝
永火山灰を廃棄した土坑群(10 区)などが発見さ
れました。

子易・中川原遺跡 1 区北と呼称する調査区
を中心に、平成 25 年度から継続して調査を行っ
ています。平成 26 年度は、古墳時代から中世の
遺構調査を実施していますが、中世の呪符木簡
や、古代～中世の池状窪地、古墳時代の横穴墓群
など、特筆すべき遺構、遺物の発見がありまし
た。木札に呪いの言葉が墨書された呪符木簡
は、調査区最下段の埋没谷で発見されたもので、
中世の木簡としては伊勢原市内初の発見事例と
なるものです。池状をなす窪地は、調査区上段
部分の広範囲に及んでいました。谷の流末が堰
き止められて現出した自然の池なのか、人工的
に造られた池なのかは明らかになっていません
が、西側隣接地にあったとされる廃寺(安楽寺
跡)との関係が気になる興味深い発見となりま
した。今回発見された横穴墓群は、これまで存
在が知られていなかった一群であり、本遺跡の
内容を書き換える貴重な発見となりました。

伊勢原市 No.163 遺跡 平成 26 年度は、6
区拡張区と呼称する調査区を中心に、中・近世の
遺構調査を実施しました。6 区拡張区は、昨年
度調査で発見された中世の石敷道路状遺構の
東側延伸部分にあたる調査区で、石敷道路状遺
構継続部分の発見が期待されましたが、残念な
がら、道路東端部は調査区の境界部分に設置さ
れた近世の石垣によって破壊されていることが
明らかになりました。

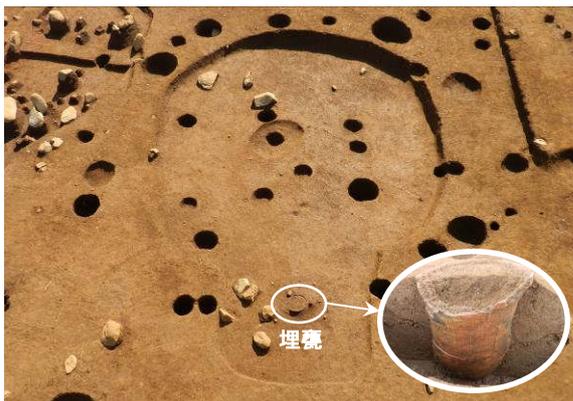


写真1 子易・大坪遺跡 8区 縄文時代後期の住居址



写真5 子易・中川原遺跡 1区北 古代～中世の池状窪地



写真2 子易・大坪遺跡 8区 縄文時代中期の集石

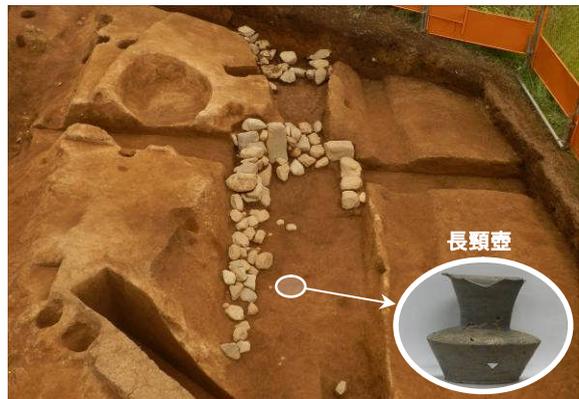


写真6 子易・中川原遺跡 1区北 古墳時代の横穴墓



写真3 子易・大坪遺跡 9区 中・近世の自然流路



写真7 子易・中川原遺跡 1区北 中世の呪符木簡



写真4 子易・大坪遺跡 10区 近世の宝永火山灰廃棄土坑



写真8 伊勢原市 No.163 遺跡 6区拡張区 中・近世面全景

かみかすや いしくらなかいせき
上粕屋・石倉中遺跡第2地点

所在地 伊勢原市上粕屋 1493-2 他

調査期間 平成 26 年 4 月 1 日～調査中

調査面積 6,854 m²

遺跡の立地 遺跡は大山から伸びる鈴川が形成した扇状地、鈴川の谷とその東の涸谷に挟まれた段丘上に所在しています。遺跡が立地する段丘は両側が急峻な崖線となり、南側に向かってゆるやかに下がっています。遺跡周辺の標高は 88m ほどです。昨年度に引き続き段丘を東西に横断するように発掘調査を行っています。今年度は昨年度の調査区南側を調査しています。

調査の成果 これまでに、縄文時代・古墳時代・近世の各時代の遺構・遺物が発見されています。

近世の遺構としては道状遺構、溝、土坑、畝状遺構、不明土坑、ピット、水車小屋跡等が発見されました。

道状遺構のうち、最も規模の大きな 3 号道状遺構は、幅 8 m 深さ 2 m の掘割状を呈し、その規模と方向から近世に大山への参詣に使われた大山道と推定されます。昨年度発見された部分の南側の斜面下方に相当しますが、昨年発見された部分よりさらに深く堀割状になることを確認しました。また路面から堀割上へ登るスロープを発見しました。3 号道状遺構に接する屋敷地の出入り口であった可能性も考えられます。また、昨年度の調査区で発見された部分は、西暦 1707 年の富士山噴火に伴う宝永火山灰が降った時には畑になっていましたが、今回調査した部分は、その後も道として使用されていたことが判明しました。道跡は昨年度の調査区との

境界付近で、東側に折れて続いていることが確認できました。

近世の遺構として特筆されるものに、近世末の水車小屋跡があります。この遺構は緩斜面を削って造成した平場に設けられた石垣と石組溝・竪穴状の掘り込みが一体化したもので、その形状と地元の方からの聞き取りにより水車小屋跡と判断しました。水車小屋跡の調査事例は考古学的に大変珍しいものです。

古墳時代の遺構としては古墳が 3 基発見されています。昨年度調査したものとあわせて全部で 6 基発見されたこととなります。墳丘や死んだ人を埋葬した部分は残っていませんでしたが、古墳をこわした穴から勾玉・管玉・切子玉・コハク玉など副葬品の一部が発見されています。

縄文時代の遺構は後期の敷石住居跡が 4 軒発見されました。昨年度の調査でも同じ時代の敷石住居跡が 2 軒発見されていますので、これまで発見された敷石住居跡は合わせて 6 軒となりました。敷石住居跡で構成される集落が展開していたものと考えられます。



写真1 道跡（近世）



写真2 道跡におりるスロープ（近世）



写真3 水車小屋跡（近世）



写真4 4号古墳（古墳時代）



写真5 5号古墳（古墳時代）



写真6 勾玉・管玉・コハク玉（古墳時代）